

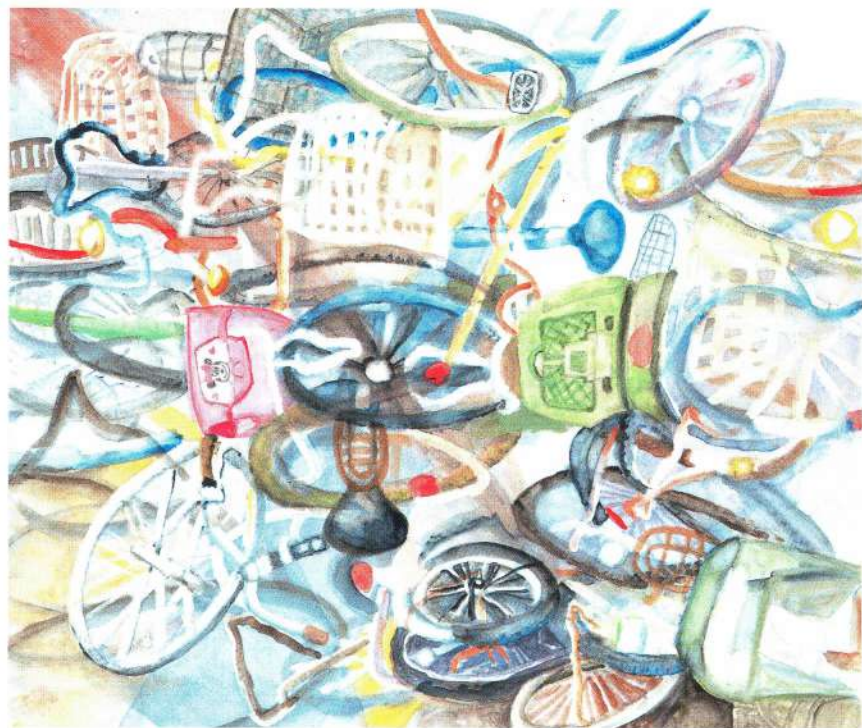
村野次郎創刊

香 蘭

二〇二〇年(令和二年)四月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第四号



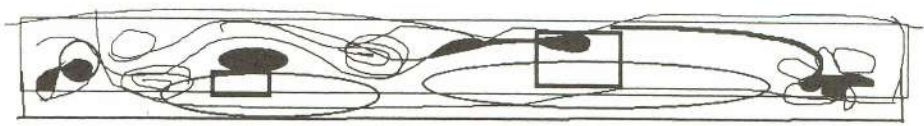
2020年(令和2年)4月号

香山静子歌集『銀の蒼』批評特集

第97卷

第4号

通卷1072号



香 蘭

2020年(令和2年)4月号
 香山静子歌集『銀の苔』批評特集
 第97巻 第4号 通巻1072号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(56)		
	作品一特選	石井・西野・横山・坪倉・坪	関口 静子
	作品二、三特選(二月号)	鈴木(桂)・大井田・水本・川原	表二
	近詠十五首 「うすら日のなか」	松沢・武藤・小原・竹本・中村	中村(か)
	作品	中村(陽)・藤田・安田	土井 絃二郎
	一		8
	二		6
	三		4
	推薦香蘭集		23
	香 蘭 集		46
	村野次郎への旅(121)	千々と 久幸	55
	歌の生まれる場所(87)	坪倉 寛	20
	香山静子歌集『銀の苔』批評特集		22
	山野吾郎(30)・花山周子(32)・大西久美子(34)・丸山三枝子(36)・		
	渡辺礼比子(38)・鈴木桂子(40)・市川義和(41)・内藤美也子(42)・		
	関口静子(43)・牧田明子(44)・河野慎二(45)		
	七首抄(二月号)	桑原・西・丑山・原(礼)	60
	エッセイ・自由研究 「隠岐の後鳥羽上皇」	青山 侑市	53
	焦点(二月号) 「死はどう詠まれているか」	大井田 啓子	62
	作品一特選欄評(二月号)	渡辺 礼比子	64
	他誌拝見 112	中井 房江	66
	近詠十五首 「見返れば」評(二月号)	飯島 智恵子	67
	作品一	千々と 久幸	68
	作品二	宮口 弘美	70
	作品三	柳 沼 美也子	72
	香蘭集	内藤 美也子	74
	緑地帯	飯島・桑山・中島(絃)・荒卷	76
	明宝研究会第一一五回一月例会	沢口 美美	79
	文法あれこれ(11)	田中 あさひ	86
	歌会及び会合・会員消息・他		
	編集後記・新宿日記		
	表紙絵	中村 陽子 「重なり合って」	94
	目次・緑地帯カット		
	和田 和雄		表三

村野次郎作品 私の愛誦歌 (56)

踏まれたるあら草の中に起きあがる

一茎のありて花白くつく

『村野次郎歌集』

昭和二十九年、先生六十歳頃の作品である。よく観察していらつしやる。あら草の中に起きあがる一本の草、それに白い花がついていた。小さな事象を詠んでいるが、人生論のようにもとれる。大人しい歌とも思えるが、勢いはあり、また白い花が可憐でもある。「花白くつく」は印象的である。

先生ご自身が、「如何にして自己本然の姿を表現すべきかに意を用ゐて來たと信じてゐる。これには自己に真面目であり、真実であるより外に道はない」と書いている。確かにこの言葉に則した歌である。

また、千々和代表が書いているように、先生は『ソフトフォーカス』という言葉をよく使われた。「それとなく匂わすような歌いふりを好まれた。」とある。おおらかなお人柄と無縁ではないようである。

(短歌研究文庫『村野次郎歌集』180頁、『村野次郎三百首』77頁所収)

四 選 者 の 作 品

友 よ 平塚 千々和 久幸

鬼平と十津川警部見尽くして三月雨の日曜日果つ

濃密な交わりなりしがいつからか消息絶えし友のいくたり
悲しみを全身で耐えている友の熱量にわが気圧されて立つ

川べりのスタンドバーで酔い潰れ喧嘩別れせし日茫茫

どこで履き違えられしか靴底の減りしを酔いて履けばよろめく
居る筈のなき友が来て何ごとか呟く夢にはあらぬ声にて

実効に期待あらねど妻のため「リハビリ計画書」にサインせり
稽田に冬日射しおり連休の中日に妻を見舞いてくれれば

会わざるもよし 我孫子 丸山 三枝子

楡の木のベンチにおれど友達に今日はあわざり会わざるもよし
冬木々の上枝わずかにゆれており会わざるままに一月の逝く

冬ざれの池を見ている帰りたいわれと道草したいコムと

鳩鳥が首さしいれて生まれたる水紋ゆるく広がりゆけり

鳩は去り水紋も消え冬池の水の底なるそこしれぬ闇

生涯に一日きりの生日の七十一歳きょうの浮雲

とどまらぬ時間のなかの今日の空どの日でもなき浮雲なびく
へり光る夕雲ひとつ泛びつつ 歩きつづける資料館まで

心を捨てて 東京 桜井京子

東京にみぞれ降る日よ霰でも雪でもよろし今の気分は
かへすがへすも口惜しかるは校正の見落としにして百鳥さわぐ
たつぷりと水滴ちてくる街川に何処へも行かぬ浮橋がある
運不運言ふにもあらず庭隅の掃溜菊はただの草なり

そのうちにと言ふばかりなりしリフォームを思ひ立ちたりわれの冬日よ
収納も使ひがつてもよろしいと生活の匂ひのなきショールーム
あれを捨てこれも捨てむとむらぎもの心を捨ててゐるにあらずや
人生の苦さをもつと味はへとカカオ八十六%チョコ

おにぎらず 横浜 渡辺 礼比子

障子貼る夫を手伝う職人の女房のごとく掛け声かけて

(ハワイ風おにぎらず)など作らんかびしよびしよ春の霰降る夜は
なぜ服を畳まなければいけないの くだびれ果てし夜の寝ねぎわを
洗い干し畳みて仕舞うあらいほしたためてしまふ昨日も今日も
めんどくさいめんどくさいと拭くガラスいつまで拭いても曇りが消えぬ

「シートごと飲み込むと胃に突き刺さるおそれがあります 湘南薬局」

売れ筋は「よこすか海軍カレー」とよ海軍さんはありがたきかな

戸籍課の椅子に普段着の人ら待つ 老いたるノラも紛れていんや

作品一特選



(五選者共選)

ブラマイ・ゼロ

習志野

石井雅子

もう過去となつてしまふか五十年に少し足りない二人の暮らし出来るならメールで告げたい「愛してる」まだ生きてゐるケータイ宛てに意識まばら最期の日々の濃密さがLINEに残りわたしを泣かす年内に一人生きて一人逝きブラマイ〇ゴの家族なりけり
亡き夫の面ざしに似た嬰児あひこを新しき年の産院で抱く

方丈の庵のレプリカ覗き込むお一人さまになりたるわれが
新年の卓にあなたの好きだつたサツポロピールの星が光れり

で

東

京 西野 美智代

歳晩の篠崎水門風つよく白き波頭がカラスを囓めり
でで虫になつてしまつてコルセット負ひしづと病室を出る
マスクにて顔半分を覆ひたる理学療法士はイケメン揃ひ

大晦日元日なんか別世界 日に三時間のリハビリたのし

スカイツリーの点灯未だ 日没に少し間のあるわが家の方位

足下の小さな塵はスリッパで少しずらして無いことにする

乳母あはは日傘の姫の気分におぶおぶと見守られゆくリハビリ散歩

消えて華やく

宇都宮 横山 慎夫

会合には出ても消えるは自由なり無冠であれば消えて華やく

いい時代を生きたものだAIなんぞに操られてたまるものか

わたくしが心配する事じゃないけれど予算100兆円借金1000兆円

相続は放棄した方がいいと言う相続財産があればだけれど

空を飛ぶ車と言うが現れて交通渋滞空にて起こる

うらうらと舗道歩けば頭上より事故車降りくるそんな日が来る

一人用のお節セットを買えばわが正月はままごと遊び

御馳走さん

ふじみ野 坪倉 寛

寒けれど快晴なりき去年のけふ着膨れながら退院したり

全館暖房にはあらねどもこの我が家病院にはなき炬燵が温し

病窓に新春の富士はるかにも望みし年明け忘れはしない

せち作りなどは無理だが病院のお雑煮よりは多少ましだぞ

飯も風呂も頂きますにご馳走さん別に気にせず言ひ来しが

三が日おはりて孫ら帰りたりわがものならぬ髪を落として

我が庭の赤き実すべて食ひつくしはた嘴をすばめて柚子つつく鴨ひよ

晴れの海まで 東京 坪 裕

人生の逆走ならば良いけれど車の逆走いのち捨ててるぜ

山茶花にじつと見られているうちにだんだん顔が赤くなりたり

つぎつぎに列車乗り換え月に在る晴れの海まで辿り着きたし

確執を抱えて歩く露地裏にあきらめの如く冬陽射しおり

雪国に雪が降らぬと言う便り異常気象で日本が減ぶ

夕暮に崩れ始めし山茶花は夜もしきりに散りいそぎいん

潮騒がはらわた深く染み込みみて電車に乗つても響きくるなり

姉あね 弟あに 西宮 鈴木桂子

デイスられたと息子が嘆く 弟に説教するのが好きな姉あて

(ありがたい)はさようならだつた 届きたる友のメールの最後となりぬ

ペランダに月光を浴む冬の夜の 消えゆくもののひとつかわれも

いつになく饒舌な夜は患者の死に会ひたるならむ娘を思ふ

朝の日の光あまねし空高くタワークレーンは荷を吊り始む

ローソンに買ひ来し熱きコーヒートを静けき昼の公園に飲む

最近のそれはちがふと思はするきみの歌読む少しさびしき

切符 川崎 大井田 啓子

ふるととへの切符求むと並びたり紅葉のポスターに見つめられつつ

なくしてはならぬ切符ぞ改札を通す一瞬足早となる

改札をわれより先に出る切符今日も二歩で追いつきにけり

音たかく切符に穴を穿ちぬし鉄ありしよ昔むかしよ

窓外にバスは朝の織月をいつとき見せて角まがりたり

「頑張る」はたとへば電車の走る音ラッシュアワーを都心へ向かふ

小田急で帰る加奈さん券売機のそばで今日もさよならを言ふ

冬 一 献 倉敷 水本 美恵子

新築のアパート今日より灯が点り人居て人の声なき町内

日常の手もとに友の歌があり折々われに思い出せとよ

睡眠薬たちて老醜さらさむと決めればわが脳応へて来たり

山形自慢の「冬一献」が届きたり備前の活券を言ふてもおれず

冬を越すむらさきしじみが瑠璃色の羽を広げる利那に出会ふ

冬の花八ツ手が蜜をしたたらす鶉が鳴くなり軒先に来て

少しづつ我より優れてゐる子らが来てあり余る若さふりまく

咳してばかり 川越 川原 優子

はくはくとイケメンの横に座りたり座りて気付く咳してばかりと

息荒く乗り込んできて治まらぬ男の息に付き合わされて

川越の駅の本屋の店先に神籤ハンカチ土産が並ぶ

雪だから休むと言つて得し時を家に籠りて歌ができない

甚大な被害でありしが離れ住めば古里の水害ニュースを出でず

サスペンスドラマの常に崖つ縁に追いつめられて俳優が立つ

苦言いう人を遠ざけ存える安倍政権のずるずるべつたり

作品二、三特選



(二月号作品から) 桜井京子 選

〈作品二〉

公孫樹 安来 岩田明美

七百年を山寺に立つ大公孫樹黄葉纏ひて南妙法蓮華経

峡わたり吹き来る風に銀杏はばらばらと降るようこそと降る

青空を突き抜くやうに聞こえる百舌の高鳴きああ晴れ晴れと

この秋を確と生きたる証しとぞ蟋蟀残りの命に鳴けり

十連の干柿いよよ透きとほり冬立つ朝の風に抱かる

病みがちな吾に夫の零余子飯美味しと言へば四度炊きたる

・ 移りゆく季節を見つめ瑞々しい感覚で対象を捉えている。

初秋のひかり 長野 白井 紀代子

不明者をさがす広報の音声が初秋のひかりの里に流れる

孤独死へいたる時間を思うとき稲穂をわたる秋津きらめく

銀河系宇宙へ指示は届いても行方不明になる人がいる

風化せし記憶のように山繭のうすきみどりは風にかがよう

・ 人間界の不条理と穏やかな自然とを対比して詩情がある。

七十七パーセントの幸せ 柏 江口 絹代

遠くまでからんと晴れて秋の空カラスだつてそりや昼寝がしたい

あなたの人生、幸福度七十七パーセントです。ネット占いで検索すれば

沿道の銀杏並木の枝切られ老人ホームに陽のさす朝

美しく老いたいなどと言う人の気持の知れず 次郎柿たわわ

・ 奔放な詠み口からさらに自由な思考へと飛躍してほしい作者である。

情報交換 尾道 岡野 甫 江

ラグビーの選手の国籍ゆるやかに皆ちがつてみんな日本

十一の歌誌読みなづみ疲れしよそろそろ煮あがる風呂吹き大根

どの歌も老いとたたかひ垣間見す若者たれもが忙しさうで

竹藪に数多の雀群れてをり情報交換の囁り満ちて

・ 闊達な心模様を折々の場面を過不足なく的確に捉えている。

木 枯し 横浜 杉山 伊都子

隣国の国花むくげの葉も黄ばみもの思ふこと多き初冬

落葉松の金の矢降る日を夢見をり木枯し一号今日のよこはま

冬ごもりのリスの笑顔を思ひみる吾の拾へぬ栗多ければ

落葉たき芋焼くこともなくなり孫育ちしを少しさびしむ

・ ここにないものに思いを巡らし思いを深めている。

家 族 福岡 中村 かよ子

玄関に散らかる靴と笑い声扉の向こうの確かな家族

帰省してリビングにいる君を見るソファが少し縮んだよう

朝朝に張り詰めていく冬の香の緩みて昼の山茶花白し

あの駅はどこだったのか銘仙の着物の母が手を振っていた

・現実と非現実が混在しながら輪郭が曖昧になっていく過程に魅力がある。

なめろう定食

さいたま

松 沢 みどり

刻まれて叩かれ味噌にまみれたる鰯のなめろう定食旨し

皿の鰯は微かに口を動かせり身を削がれ串を刺されたのちも

店を出て職場への道を漕ぎ出せば冬のはじめの風がつかめたい

・職場で昼食をとりに出たひと時をリアルに再現して興味深い。

四杯目まで

東京 武藤 昭彦

「西郷どん」最後のシーンを録画してラ・マルセイユをくりかえし聞く

となり合う陸摩おごじよに芋酎で挑むも記憶は四杯目まで

西郷の逝きて百年かごしまに許されて建つ大久保像は

西日受け茜に染まる炭住の廃墟にとびが羽を休める

・歴史や土地に対する思い入れを抑制しつつ詠んだところで味わいが出た。

〈作品三〉

薄 目

鎌倉 小原 裕光

方丈の座禪を真似る五歳児に座禪の僧は薄目を開ける

テーブルに置かれしニユートン特集号『無とは何か』に一瞬怯む

鳴き尽くし地へと落ちたる油蟬残暑の空を掴まんとする

冠水の路上を鯉が泳ぎゆく温暖化対策猶予はあらず

・人生や社会への洞察に奥深さを滲ませ、四首目の具体は説得力がある。

思 秋 期

千葉 竹本 幸子

日の暮れて行幸通りに灯がともり仄かにわれの心を照らす

木犀の香にめまいなどしておれぬ迫るこの冬越えねばならぬ

持ち慣れぬ紙ストローなど渡されてあわてて飲みきるアイスカフェオレ

近頃はすべてが儚く思えたりこれよりわれは思秋期に入る

・ほのほのとした気分の中に一本筋の入ったたたかさも秘めている。

並 ぶ 人

東京 中村 陽子

整然と水配給に人は並びタピオカ店にも人は並びぬ

東京を新幹線で離れつつ詰まらぬ執着窓に流れる

旅に来て遠き伊勢にも人の住むわれは世界の中心でなく

夜の窓を開ければやさしく差す光三十八万キロ彼方から

・心にわだかまっていたものを吐き出した。短歌の効用がこんなところに。

ハロウイン

横浜 藤田 祐恵

物干しに両手ひろげて吊されてぬげ殻となったハロウインのつなぎ

誰よりも晴れの私を知っている五センチヒールのエナメルパンプス

しんとして何かが潜んでいるようなここは地下三階駐車場

・都会に生きる現代の女性の渴いた感覚に魅力がある。

陸に戸惑う

行田 安田 恵子

おおかたは枯れてしまし蓮池の面に力なき秋陽がゆらぐ

台風に打ち上げられし池の辺の布袋葵は陸に戸惑う

破れ蓮の折れて色なき蓮池は敗者のごとき貌にしずまる

・対象を確かな視点で観察し切り取り方が個性的。

うすら日のなか

土井紘二郎

青空に貼りつくやうな木守柿眼まなこにとめて秩父路をゆく

奥多摩の色づく山を前景に富士の嶺はるか白く輝く

雪被る遠き山なみくきやかに稜線みせて朝の日に輝る

ほつぽつとはぢらふごとくきぬさやの白き花咲くうすら日のなか

暮れ早き師走の街をそそくさと人の行き交ふみんな無口で

なにがなし不安のよぎる夕まぐれわれより若き人の訃を聞く

ふいにでる「鏡のごとき瀬戸の海」校歌の一節むねにのこれる

たどりきし点字ブロック地下に消えわが行先は闇にまぎれる

気遣ひの人にこまめに気遣はれ今日の飲み会疲れて帰る

ボランティアガイドに木の名教へられ庭園出でてみな忘れたり

明けやらぬ道を急ぎてAコース時間どほりに交番を過ぐ

ひと言随想

定年畑

徒歩三分以内にコンビニ二四つあり一つがつひに撤退したり

温泉旅館の廊下の奥に積まれたる卓球台のネットのふて寝

立派だと自賛してゐる大根が子にはソツポを向かれてしまふ

品川の沖の景観おもひつつ観潮楼の敷石を踏む

区民農園で野菜作りを始めて十五年ほどになる。初めは全くの素人であったが、経験を重ねて少しずつ要領を覚えてきた。

春はジャガイモ、インゲン、大根、春菊等。秋は大根、キャベツ、ブロッコリーなどを育てる。こういうと大層な畑のようだが、広さは五坪ほどのちっちゃなものである。いつだったか「定年畑」と揶揄されたことがあったが、なんと言われようと、自分の好きなようにや

らせてくれということである。

そして、何であれ収穫できれば嬉しいものである。採れた野菜は友人やご近所に貰っていただく。あるいは押し付けられて迷惑な人もいるかもしれないと思いつつ配る。

また、畑の土をいじっているとつか憂さも忘れて没頭し、自分が無になれるのである。ここで一つの言葉でも浮かべば、歌の生まれる場所となり、自己満足に浸ることになる。

「ザムボア」と次郎 (十四)

千々和 久 幸

「ザムボア」(朱樂) 第四卷第四號は、大正七(1918)年四月一日の発行。編輯兼發行者北原草子、發行所紫煙草舎、定價一部金貳拾五錢は前号と変わりはない。表紙は北原白秋の朱樂の實のスケッチ、裏繪はフリッツ・ルンプの鵝のカット。これも前号通り。

この号の本文は42頁だが、他に巻末の広告が7頁、そしてその廣告料が一頁金拾圓となっている。ちなみに広告主は「アララギ」「水壘」「珊瑚礁」「寂光」「嬰兒」「短歌雜誌」等である。見開き2頁の目次のあとには、エミール・エルハアレンの詩「鷺の歌」が1頁2段で掲載されている。そしてこの号は作品と作品評のみで構成され、他に散文の類はない。村野先生の作品は、河野慎吾の「秋雨」六首、「その折ふし」三「七首の後に」「火事」八首が掲載されている。

- ①夜の森に三日月かかり焼跡に面明かるく人つどひ見ゆ
- ②顔の佳き女に逢ひぬたつ煙とほしくなりて朝明け行けは
- ③灰土を踏み越え來り焼け残る土蔵の壁に熱さを覺ゆ
- ④このところは野べならし白米の黄にくすぶりてちらばり居るも
- ⑤焼跡に童子あつまり掌の銅貨見守れり煙の中に
- ⑥赤煉瓦いまだ温める焼原に幼子胤を持ちて遊べり
- ⑦焼跡の濡れし疊に居る鶏のうつつねむる晝近からん
- ⑧火事のけむりのがれて來れば井戸ばたにアルプスの葉書濡れて落ちあたり

この一連は近隣にあった火事の鎮火後の光

景をスケッチしたものである。延焼中に來合させたものではないだけに、いずれも冷静に詠まれている。また格別難しい歌もない。

①の歌、火事の現場を広角的に遠くからレンズに収めたという趣の歌。折しも近くから森の上に出ているお詠え向きの三日月を配し、一首を盛り上げている。焼け跡を描写するにしても、それだけの小道具―工夫というべきだが―が要るのだ。

下句の「面明かるく」にも工夫があつて、鎮火後の一先ずの安堵感が窺える。人々の面差しもそうなら、話し声も明るく聞こえる。

②の歌、一首の眼目はむろん初句の「顔の佳き女」である。この作が大正7年ならば、先生は二十四歳。女性に目が行つて不思議はない。火事は鎮火したものの、そこらの残り火から乏しくなつたとはいえ未だ煙が立ち上つていたのである。

朝早くそんな場所に「顔の佳き女」が立っていたので、先生は興味を示されたのだ。ここでも場面設定―小道具のあしらい方が効いている。

③の歌、先生もこの火事には、かなりのこだわりがあつたと見える。通常人が持つ好奇

心を越えていると思えるからだ。わたしの推測では、村一番の雑貨商であった実家の村野商店の明日を思われてのことだった。

そんな眼でさらに焼け跡の灰を踏み、つぶさに見て行くと土蔵は焼け残ったもののその壁に余熱があった、というのだ。土蔵があるくらいだから一般の民家とも思えない。あるいは商家ではなかったろうか。そんなところもこの火事が、あつてはならぬ実家の災禍と重なったのだらう。

なお五句の「熱さ」は「熱さ」の誤植だと思われるが、そのままに置いた。

④の歌、さらに先生の焼け跡の実情観察は続く。土蔵から本宅の方へ戻ってみると、厨らしい場所があつて、焼け跡に黄に燻った白米が散らばっていた。そこでも先生は深い嘆息をもらされたのだった。

⑤の歌、④に続く二首では場面が転換し、主役が童子、幼子に変わる。⑤では好奇心の強い子供たちも既に焼け跡に集まつて来ている。彼らの興味を引いたのは、焼け残った銅貨。早速拾い上げ、掌の上に乗せ矯めつ眇めつしながら何か語り合っているのだ。

先生も子供（の好奇心の強さ）にはかなわ

ないなあ、と苦笑されているのだらう。

⑥の歌、ここでも先生は幼子のひたすらな遊びごころ、行動力にただただ感心されている。鎮火したとはいえ余熱はまだあるのだ。しかし子ども達は委細構わず、風を持って辺りを走り回っている。

先生も幼子にはたじたじである。ただしこの種の作品は光景の面白さに作者の感動があるから、どうしても説明的にならざるを得ない。つまり先程来こだわつてきた小道具一場面の設定が逆に少々煩わしくもなる。

⑦の歌、難を逃れた鶏だろうか、それとも火事現場から離れたところで飼育されていたものか。火事で水を浴びた畳の上で、何事もなかったように眠っている。事柄はただそれだけ、それだけの光景である。

火事の後で右往左往のまだ治まらない人間どもを尻目に、こちらは鴨気（本能のままに）昼寝をしている鶏。同じ動物で、こうも違うものかと、先生は鶏を見やっていると構図。それにしても「考える葦」は難儀なものだ、と思われたものかどうか。

⑧の歌、火事現場を離れてきた先生の眼には、ここにも火事の飛沫を浴びたアルプスの

絵葉書（だるう）が落ちていたのが眼に入った、という歌。こんなところにも被害者が居たわい、というくらいに感概だらうか。

今月の一連も先生は身辺にあつて若い心が動いた光景、事柄を細大漏らさず丁寧に描写されている。後年、わたしが直接耳にした、いわゆるデッサン（の大切さ）である。

こんな地道な努力が後年の先生のあの軽妙にして時に飄逸な作風を生んだことに思いを致せば、かくも孜孜たる基本作業の積み重ねの重要さを改めて痛感する。

この号に北原白秋の作品は無いが、のちに「香蘭」に籍を置くことになる顔ぶれが出詠している。知る限りでは酒井廣治、穂積茅愁（穂積忠か）、筏井嘉一、池上秋石、石野良夫（正太郎か）等々である。

ついでに記せば今月の消息欄には、次のごとき記述がある。

北原白秋氏は夫人徹善の爲め先月上旬小田原に赴かれ同地御幸ヶ原養生館に滞在して居られたがこのほど新居を小田原十字四ノ九一へトされた。